V 大正時代の学習院

明治10年(1877) 10月に華族子弟の教育のための華族学校として出発した学習院は、同17年に宮内省管轄の官立学校となり、同18年には華族女学校が設置され、徐々にその規模と役割を充実させていきました。そして大正時代、改正された高等学校令に基づいて新たな学制や教課課程の改正が行われるなど、更に著しい発展をみるのです。

女子学習院の成立

大正時代にあった大きな出来事としては、まず女子学習院の誕生が挙げられます。明治17年(1884) 4月に学習院が官立学校となった際、女子教育の官立学校新設が計画されます。同18年11月に学習院から分立する形で華族女学校が開校、校舎が四谷尾張町(現新宿区若葉町)に設けられました。その後、同39年4月に学習院学制が改定されたことで、再び学習院と合併して女学部となります。

そして大正7年(1918) 9月に高等学校令が改められたのに従い、学習院学制も改正されます。この時、学習院女学部は、女子学習院として青山の新校舎(現明治神宮外苑)で再び独立しました。11月14日、貞明皇后の行啓を仰いで開院式が挙行され、令旨(りょうじ)と記念品を賜ります。なお、開校記念日は従来通り華族女学校開校式が行われた日である11月13日とされ、毎年記念日には祝賀式が行われました。また、大正時代を通して卒業式には貞明皇后の行啓があり、卒業生には記念品が下賜されました。

女子学習院では、こうした恒例の儀式のほかに、皇室の御慶事の際には祝賀式を行ない、記念品を献上しています。同11年4月12日にイギリスのエドワード皇太子が来日した際も、歓迎の意を表して「四季之花」という献上絵巻物4巻を製作しました。これには学生たちによって、日本固有の花草75種と、それに関係の深い鳥類昆虫類18種、日本の伝統的造形物である鳥居や八橋(やつはし)、鳴子(なるこ)などが描かれました。同年4月13日、赤坂離宮において、エドワード皇太子に絵巻物が献上されました。

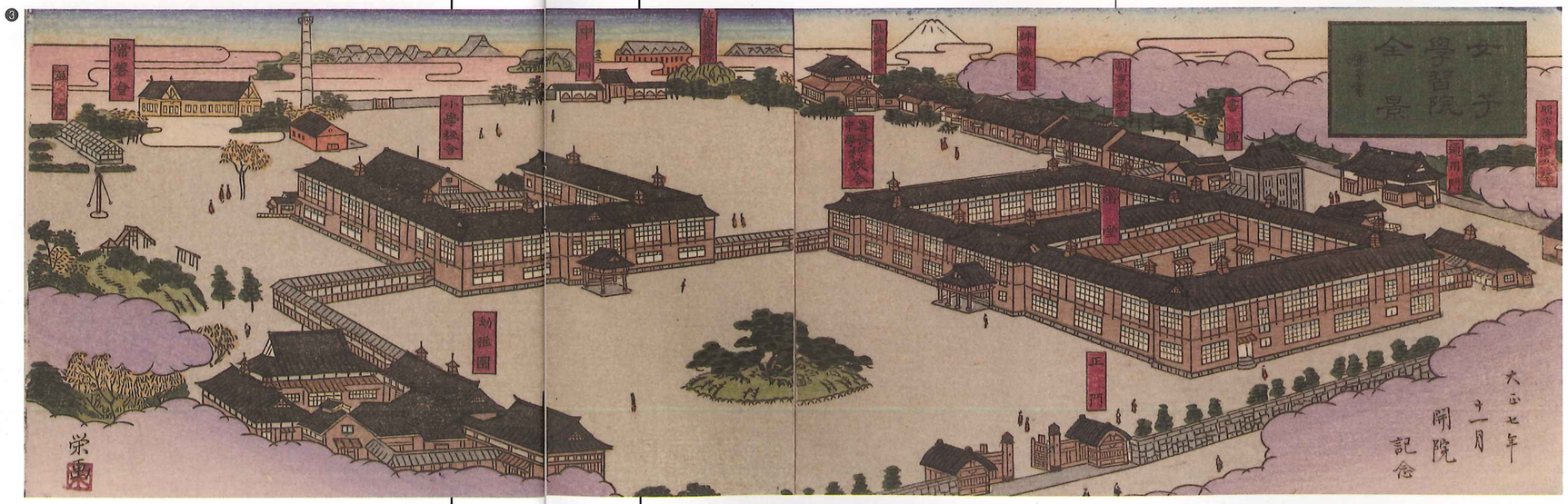
❶

皇族就学令の制定

学習院が皇族の教育機関として機能するようになったのも大正時代でした。これまで皇族の就学についての規定はなく、皇族は慣例として学習院に通学していました。しかし皇族の増加に伴って皇族就学に関する規定制定の必要性が生じます。大正15年(1926) 12月に皇族就学令が公布され、ここで初めて、学齢に達した皇族の学習院・女子学習院への就学が定められたのです。皇族男子は、同2年4月に完成していた皇族学生のための別寮(皇族寮、現東別館)に寄宿しました。

この別寮は関東大震災の激震を乗り越え、現在も学内に静かに佇んでいます。

❷



❸

学生海外見学旅行の実施

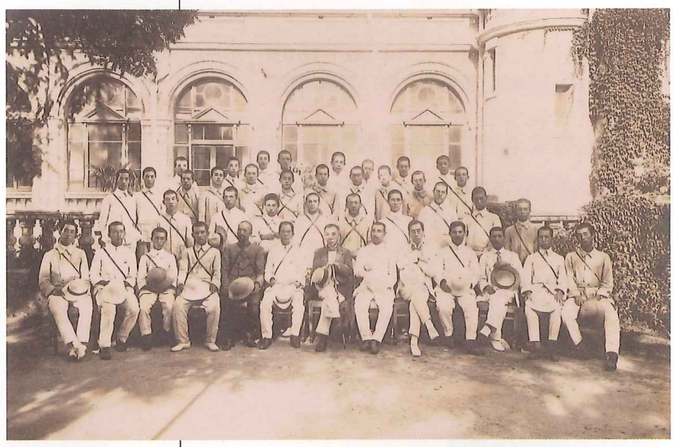
いつの時代も学生たちが楽しみにしている学校行事と言えば、修学旅行でしょうか。学習院では大正7年(1918)から夏季休業を利用して海外見学旅行が実施されるようになりました。旅費は行き先によって異なりますが、多い場合は1名につき300円程度、少なくとも170円程度を要したといいます。ちなみに当時の学習院の初任教授の月給は150円程でした。

旅行の行き先は、中国や満州、朝鮮、台湾などです。日本は明治38年(1905)の日露戦争勝利によって南満州鉄道をはじめとする数々の利権を獲得、さらに同43年には韓国を併合し、積極的に大陸進出を行っていました。将来、帝国大学や士官学校に進学し日本の行く末を担う人材になるであろう学習院の学生たちは、この旅行の中で日本の大陸政策の現場を見学してまわりました。

『学習院輔仁会雑誌』には、大正7年7月17日神戸港を出発してから8月14日下関に到着するまでの学生たちの日記が掲載されています。青島を訪れた際のある学生の日記には、「日本帝国に対して此地の如何に重要なるかは言を俟たざる所であるが、(中略)必ず我が国防上青島の如何に解決せらるかは何人も当然思考すべきことにして又将来の我国運に影響の最大である事を忘れることは出来ないのである」とあり、学生たちの国政への強い関心と、青島領有への高い意識が感じられます。

しかしその一方で、「西瓜等は如何にも美味しさうに見えて渇してる我等はつひに我慢しきれず、大きな奴を買つて食ひ」という場面もあり、食べ盛りの学生らしい一面を感じさせてくれるのです。

(PD共同研究員　橋本佐保)


❹

❶ 大正11年　女子学習院幼児学生より英国皇太子殿下へ献上したる絵巻物
❷ 東別館(旧皇族寮 2010年撮影)
❸ 大正7年　女子学習院絵葉書
❹ 大正7年　第一回海外見学旅行 駐北京日本公使館での記念写真